

悪役令息の役どころからは
サクツと離脱することにする。

目次

悪役令息の役どころからは
サクッと離脱することにする。
1

7

番外編 ルディアス視点

361

番外編 カゲくんの正体

383

シリウス・ブレイン

ミルリスの侍従兼側近。
元は伯爵家の三男だが、
ミルリスの侍従になるため
自ラ家を出るほどの溺愛ぶり。

ミルリス・スノーデン

筆頭公爵家スノーデン公爵家の長男。
ある日突然、前世を思い出し
ここがBLEGEUMの世界で、
自分はその悪役であることに気づく。
その美貌ゆえに周りから
距離をおかれており
若干、箱入りの気質がある。

レオリス・スノーデン

ミルリスの弟。
両親に溺愛されていて、
自分が可愛いことを自覚している。
周りに愛され助けられるのが
当たり前だと思っている。

アルフレッド・マージス

貴族の間で有名なマージ宝石店の店主。
シリウスの学生時代からの友人。
ミルリスのことを気に入って、
力になってくれる頼もしい仲間。

ルディアス・ゴールド

ミルリスの婚約者だが、
「可愛げがない」と冷遇している。
同学年に正妃の息子で
双子の兄王子たちがいる。

CHARACTERS

悪役令息の役どころからは
サクッと離脱することにする。

プロローグ 俺、悪役令息だった！

お約束の「キキー！」「ドン！」の後、目を覚ませば異世界だった。

……というわけでもなんでもなく、いつも通りに目を覚まして侍従兼側近であるシリウスに髪を梳かしてもらっている最中、鏡に映る自分の顔を見ていきなり頭の中に前世の記憶が蘇った。

「！俺はもしや、悪役令息なのでは？」

怒涛のように脳内に記憶が溢れる。と言ってもごく一部の偏った記憶だけで、それ以外はぼんやりしているのだが、それでもこの顔に俺は心当たりがあった。

前世で腐女子だった姉に頼まれて無理やりクリアさせられた、BLゲーム「僕の王子さま」の悪役令息、スノーデン公爵家の長男ミルリスだ。

確か、ゲームでのミルリスの扱いは、「プライドが高く冷酷で、主役である人気者の弟のレオリスを妬み虐げまくるザ・悪役」ということになっていた。

そう。実際の俺は何もしていない。だが、そう思われる心当たりはある。

いかんせんミルリスは顔がいい。

星のようにキラキラと煌めく銀の髪、宝石のアメジストに喻えられる神秘的な紫の瞳。その瞳に影を落とす、けぶるようなまつげ。あくまでも上品にすっと伸びた鼻梁。残念ながら身長は普通より少し低いのだが、その分足の長さでスタイルの良さで最高のバランスを保っている。

そう、俺はどう見ても可愛いタイプではない。伶俐で美貌を誇る「氷の令息」、それが俺なのだ。これが人好きのするタイプの美貌ならよかったのだろうが、整いすぎた容貌は、ともすれば人形のように冷たく見えてしまう。

美貌も過ぎれば仇となるという。その言葉通り、俺は何をしても孤高の人扱い。

元々、愛想のいいほうではないし、感情を表情に出さぬよう教育をされている。そのせいか、疲れてため息をついただけで「不快そうだ」と誤解され、「機嫌が悪い」だの「無表情で怖い」だのと言われ、遠巻きにされてしまう。

人形のように？ 無表情？

当たり前だろう。そう育てられたのだから。

実際、両親は「貴族たるものの感情を表に出すな」「常に冷静でいろ」と俺を躰け、俺が笑うのを許さなかった。にもかかわらず、自由に甘やかして育てた弟と比べ「可愛げがない」「何を考えているのか分からない」などと言って俺を貶めるのだから、意味が分からない。

さらに両親は「嫡男なのだから何もかも人並み以上にできて当然なのだ」と、俺にひたすらあらゆる知識や剣術を叩き込み、幼かった俺が遊ぶことすら許さなかった。

「寝る間も惜しんで勉強させられ、疲れと眠気で食欲がわかず食事も最低限」、そんな生活を長年

続けていれば顔色だって悪くなるし精神だって荒む。疲れて不機嫌にもなるうというものだ。

おまけに俺は何もせずとも「弟をいじめている」などという悪評を立てられている。

いじめる？ 弟になど関わりたくないのに？

想像して欲しい。頭を撫でようとしただけで弟にビクつかれ、「お兄様が僕を打とうとした」と触れ回られる毎日を。両親も周りもみな弟の言い分を信じ、こちらの言い分など聞こうともしない。

俺は幼くして悟った。「こいつらは自分が見たいものしか見ない。何を言っても無駄なのだ」と。

その時、俺は誓ったのである。俺からは決して弟に関わるまい、と。

それなのになぜか弟は自ら俺に関わりとうとし、俺を巻き込んでくるのだ。

例えば、弟は何かに失敗すると目に涙を浮かべて「お兄様は悪くありません」と俺を庇ってみせる。俺は関わってすらいらないのに、わざわざ俺の名を持ち出すのである。

するとどうなるか。

俺が「弟の足を引っ張る悪役」にされ、弟は「兄を庇う健気な弟」だと持て囃される。要するに、弟がその善性をアピールするのに反比例して、俺の評判は悪くなっていくのである。

弟がいい子？ お前らの目は節穴なのか？

前世を思い出した今となつては、俺のおかれたこの状況の原因の大半は、両親の俺に対する「教育という名の虐待」と、「無意識に俺を貶める弟」にあると思っている。

とにかく俺が何をしても全てが「悪役ムーブ」に変換される現状。

このままいけば、俺はゲームのように悪役認定され「人気者の主人公を虐げた冷酷な兄」として断罪される。具体的には「追放先の僻地にて貧困にあえいだ末に、無念の死を遂げる」ことになる。何もしてないのに、だ。

ひたすら努力を重ねて辛い日々に耐えてきただけの俺が、なぜ断罪されねばならない！ いくらなんでもおかしいだろう！

必死にコツコツ頑張ってきた勉強すら、学園では「公爵家の権力を利用して裏から手を回し、成績を操作している」と思われているし、首席を取っても両親が俺を褒めることもない。

ずっと疑問だった。

これまで辛い心押し隠し「頑張っていればいつか」「努力すれば認めてくれるはずだ」「俺も愛されるようになるはずだ」と自分を磨く努力を怠らなかつた。それなのに、なぜ俺の努力は報われない？ なぜ何をしても俺は愛されない？

でも、もう理解わかってしまった。

そのどれもこれも弟が「主人公」で、俺が「悪役令息」だからだったのだ。「そういう役回りだから」だったのだ。

前世の記憶によつて俺を待つ未来を知り、俺の心は折れた。

理解されず、報われることもなく、俺のこれまでの努力も我慢も全て無駄になるのか。そう思ったら、途方もない寂寥感と共に猛烈な怒りが湧いてきた。

なら、必死に頑張る意味などあるのか？

何をして「悪役令息だから」と全てを悪く受け止められるのなら、無理をする意味などない。今なら分かる。俺は悪くなかった。

弟のように、みんなに甘やかされ好きなことをして好きなものを食べてぐっすり寝る。そんな健康的な生活をしていれば、「元氣」で「いつも幸せそう」になるに決まっているだろう！

ろくに自由も与えられず冷遇され、まともに睡眠も食事もとれない俺と弟を比べるほうがおかしいのだ。長男だけに努力を強いて、弟だけを甘やかし溺愛する公爵家がどうかしているのだ。

もういい。どうせ悪役にされるのなら、いつそ好き勝手に生きてやる。

長男だから？ 責任を果たせ？

知るか！ こんな家はレオリスにくれてやる！ 言いたいことを言って、さっさと悪役からも貴族社会からも離脱してやる！

そうだ！ 俺は俺で公爵家から独立し、いつそ裕福な平民として生きていこう。

うん、むしろそのほうがいい。

幸い前世の知識を思い出したから、生活能力はあるはずだ。もとより貴族に未練などない。平民暮らしでも何の問題もない。

というわけで、俺は悪役令息からさっさと離脱することにした。

今、俺は十五歳で中等学園を卒業したばかり。この春休みが終われば高等学園に入学となる。

一年後、弟のレオリスが高等学園に入学してからがゲームのスタート。つまり、俺の破滅の始まりだ。

まずは敵の確認をしておこう。

確か、主人公である弟の攻略対象者は四人だったはず。

メインの攻略対象となるのは、俺の婚約者で側妃様の息子、第三王子ルディアス・ゴールド。他に攻略対象として選択可能だったのは、俺のクラスメイトで正妃様の息子、第一王子のイージス様（ちなみに第一王子の双子の弟である第二王子サージェス様は、騎士科所属のためあまり関わりがない）。だが彼はいわゆる隠しキャラなので、そう警戒しなくてもいいだろう。

それと、イージス様の側近で宰相の息子、スターツ公爵家嫡男のエリオット・スターツ。

それに弟の同級生で騎士団長の息子、ブレイン侯爵家次男のアーチャー・ブレインだ。

これらの攻略対象たちによって、俺は「弟を虐げる兄」として悪役に仕立て上げられていく。そして、俺は**・・・**罪で断罪されることになるのだ。

ということは、俺の猶予は弟が入学するまでの一年。もしくは、卒業式までの最大で三年とみていいだろう。

逆算すると、俺は一年で独立後の生活のために事業を立ち上げ、最低でも卒業より先に高等学園からも公爵家からも離脱しなければならない。

俺の計画はこうだ。断罪される前に投資により独立の準備を進め、準備が整い次第、自ら申し出

て廃嫡させ、この腐った公爵家から解放される。それと同時にルディアスとの婚約を解消する。そうすればレオリスに「婚約者を取られまいと」嫌がらせをした、などと言われずに済む。全てを捨てた俺の新しいスタートだ。

そこで重要となるのが、俺の独立の要である資金集め。つまるところ、投資だ。実はその投資先には心当たりがあった。

思い出した前世の記憶はゲームに関することが大半で、あとはぼんやりしている。だがこのゲームの知識のおかげで、俺はこれから何が起るかを知っている。そこに投資のヒントがあったのだ。ゲームによると、今年の冬、この国は感染症の猛威にさらされる。それにより、国民に多くの犠牲が出ることになる。

この病で、第一王子と第二王子は母である正妃様を、宰相の息子は可愛がっていた弟を、騎士団長の息子は愛する姉を失う。その悲しみを癒すのが、明るく前向きなレオリス^{主人公}。家族を失った心の傷によって、彼らはレオリスに傾倒していくのだ。

俺はこの「攻略対象が主人公に籠絡されるきっかけ」そのものを無くしてしまうことにした。どうしたらいいのか、答えは簡単。病を流行らせなければいい。つまり、この病の特効薬があればいいのだ。

実は俺は、その病に心当たりがあった。あれはきつと「赤病^{せきびょう}」だ。赤病、通称「赤^{あか}」は、特定の場所のみで毎年同じ時期に流行する「風土病」だといわれている。

流行国である隣国では「特効薬を飲めば問題ない季節病」という扱いで、流行時以外では何の対策もしていない。

流行国以外はいわずもがな。この国でも、自国には関係のない病だと思い込んでいた。ゲームでは「謎の感染症」の名称までは明かされていなかったのだが、この世界に生きる俺だからこそ分かる。感染拡大の速さや「赤い発疹が出た」という症状からするに、間違いなくあれは「赤」だ。

「赤」が風土病などではなく「感染から発症までが速い、ウイルス性の感染症だった」と考えれば、全てに納得がいくのだ。

「赤」が風土病だと誤解されていたせいで、治療薬の流通がなかったこの国では感染拡大を防ぐ間もなく一気に病が広まってしまったのだと思われる。すなわち、病への誤解と対処の遅れが結果的に多くの犠牲を出してしまうことに繋がった。俺はそう確信している。

だから俺は、治療薬とその材料を事前に輸入して赤に備えるつもりだ。

ちなみに治療薬だけにはしないのは、怪しまれないためだ。「赤」の発生国ではないこの国で大量に輸入すれば、俺の悪役ムーブだと最悪、俺が病を流行らせたと疑われかねない。あくまでも治療薬は最低限。輸入のメインはその材料とする。

念には念を入れて、微塵も疑いを招かぬように、他の薬やら薬草やらも併せて輸入しようと思っている。いっそ商会を立ち上げてしまったほうがいいのかもしれない。

俺があらかじめ治療薬を用意しておくことで、取り返しがつかなくなる前に治療でき、多くの人

の命が助かる。

おまけに、俺は莫大な利益と独立後の生活資金を得ることができ、断罪への道を断つことができる。

一石二鳥、いや一石三鳥だろう？

俺はもうこの世界にも家族にも、なんの期待もしていない。

自分の道は自分で切り開くのだ。

第一章 悪役令息脱却に向けて、まずは学園をサボることにする

悪役令息をやめるための手始めとして、俺はまず勉強をやめることにした。

必要な知識ならもう十分頭に入っているし、これ以上勉強せずとも上位の成績でいられる自信もある。初等学園からずっと首席を維持し続けてきたのだ。もう十分だろう。

思い立ったが吉日とばかりその日の晩からさっさとベッドに入る俺に、シリウスが怪訝な顔をした。

シリウスは、俺の侍従兼側近だ。代々騎士を輩出している伯爵家の三男で、黒髪に濃紺の瞳という、夜を映しとったような野性的で整った容貌の持ち主。年齢は俺より五つ上になる。

彼は俺が五歳のときに伯爵に連れられて公爵家に來たのだが、その際なぜだか俺を気に入り、自ら志願して俺の侍従となってくれた。

結果、シリウスは僅か十歳という年齢で実家を出ることに。だが、本人は「どうせ家は継げず、自分で身を立てるか平民になるしかありませんから」と飄々としていた。

彼は、将来公爵家の運営を担う俺を支えるため、騎士科ではなくあえて経営科に進学。そして学園に通いながら他の使用人と共に俺の世話をし、学園卒業後は俺専属の侍従兼側近となって、俺が

寝るとき以外は常に側にいてくれる。

いつも遅くまで机に向かっているはずの俺の異変に、シリウスはまず俺の体調不良を疑った。「どうしたんですか？ いつもは早く寝ろって言っても寝ないくせに。熱でもあるんですか？」

ひどい言い草だが、ずっと俺の頑張りを見てきたからか、シリウスだけは俺を悪役扱いしない。ゲーム『僕の王子さま』の中でも、彼だけが最後までずっとミルリースの側にいた。この家で俺が唯一信頼できる、兄のような家族のような気安い相手だ。

俺を心から心配してくれる代わりに、俺に対して遠慮も無いのだが。

これまでも「そんなに頑張らなくてもいいのでは？ クマができて余計に悪人顔になりますよ。もっと手を抜いてください」と何度も言われた。

「悪人顔とはなんだ！ もう少し言い方があるだろうー！」と怒ったふりをしてみせたが、本当は嬉しかった。

手抜きを勧める側近というのもおかしい気がするが、公爵の意向など無視して俺のことを心配してくれていたからこそ言葉だと理解していたから。

実際のところシリウスの言う通り。無理してまで頑張っても意味など無かったのだ。

それが分かったからこそ、こうしてだらだらしているのだぞ？ お前はもっと喜ぶべきだ。

なのに「ちよつと失礼」と俺の返事も待たず、勝手に人のおでこに手を当ててくるシリウス。長く白い指先がそつと俺の髪を掻き上げ、額を優しく撫でて離れた。

気持ちが高揚しているからか、指先の冷たさが気持ちいい。思わずその指先を追いかけてなくなる。「熱はないようですが……」と怪訝そうに首を傾げる彼に、ハッとした。危ない。無意識に擦り寄るところだった。

なんだか気恥ずかしくて、顔をプイと背けて答えを教えてやる。

「俺はもう頑張るのをやめたんだ」

サラリというはずが、なんだか不愛想な、拗ねたような声になってしまった。

それに気づいたシリウスが微笑む気配がする。

また伸ばされた手を避けるようにバサリと上掛けをかぶってシリウスに背を向け、明日からの予定を一方的に伝えた。

「明日からは朝の鍛錬も無しだ。朝食はいつも通りの時間にここに運ぶように使用人に伝えてくれ。これから食事はダイニングではなく、自室でお前と二人でとることにする。だからそのように手配して欲しい。頼んだぞ」

これまでの俺の食事の記憶は苦痛に満ちていた。

父上と母上、レオリースの楽しそうな会話。俺が口を挟むと気まずげに会話が止まる。楽しそうに笑う三人と、そこから締め出された一人の食事。

そんなことを繰り返し、俺は無言で食事をするようになった。

少しでも早く去ろうと、あくまでも優雅にかつできるだけ早く口に詰め込む食事が、美味しいはず

もない。俺の食事の量は次第に減っていった。

苦痛しかない「家族ごっこ」の時間はもう終わりだ。これからは気の許せる相手と会話しながらゆつくりと「食事」を楽しむのだ。

朝の鍛錬も、夜の予習ももう終わり。算術などは前世の影響なのか得意だし、歴史ももうとくに高等学園卒業レベルまで予習を終わらせている。あとはしっかり授業を受ければ十分だろう。

俺はこれから将来に向け、街での伝手^{つて}を広げねばならない。平民となったときに備え、自身の人脈を作り上げるのだ。

やることはたくさんある。もう俺の時間を公爵家^{無謀なご子}のために一切割いてやるつもりはない。

だが、そんな俺の内面の変化など知らないシリウスは、突然の主人の変貌に鳩が豆鉄砲を食ったような表情になった。次々に伝えられた内容に、この男にしては珍しく狼狽している。

「え？ は？ ええ!? 本気ですか!？」

「おやすみー」

シリウスが嘔然としているのをよそに、さっさと目を閉じた。たまにはシリウスも慌てればいい。慢性的に寝不足だから、おやすみから熟睡までは三秒足らず。俺はあつという間に夢の国に旅立ったのだった。

翌朝。

シリウスに起こされるまでぐつぐつと眠っていた俺は、非常に気分が良かった。

慢性的な頭痛も無くなり、頭もスツキリ！ 身体もこれまでにないほど軽い気がする。

「おはよう、シリウス！ 清々しい朝だな！」

いつになく元気な俺に、シリウスがその頬を緩めた。唇が満足げに柔らかな弧を描く。

「おはようございます、ミルリース様。それは何よりです。しっかりと睡眠をとられたからでしょうか、顔色もいいですね。いつもこうでいてほしいものです」

そう言いながら優しく俺の目元を撫で、顔と手を拭き、髪を丁寧に梳かしつけてくれる。

春になったとはいえ、まだ朝は冷える。温められたタオルの気持ち良さに「ほう」と息が漏れた。

「こちらを。着替えたらずぐに朝食を用意させますか？」

制服を手にしたシリウスが俺に問う。昨晚俺が言ったことを忘れていなかったようだ。

「ああ。一応言っておくが、俺の分だけではなくお前の分もだぞ？」

案の定、彼は俺が言った言葉の「食事はお前と二人でとる」という部分を見捨てるつもりだったようだ。にこっと爽やかな笑顔でこう言った。

「私はいつも通り隣室で」

「いや、俺と一緒に食事をとりたいたいの、他人も同然の家族ではなくお前だ。アイツらと食うと食事が不味くなる。俺に栄養を摂らせたいのなら、お前と一緒に食事をして俺を監視しろ」

こういう言い方なら、いつも俺の栄養状態を気にしているシリウスは断らないはずだ。

予想通り彼は「分かりました、降参です。本当にどうされたんですか？」と両手を挙げた。降参、

という意味だろう。よし、俺の勝ちだ。

「昨日言っただろう？ 奴らのために我慢して頑張っても無駄だと気づいた。これから俺は俺の好きなようにする。俺のために生きる。あとは食事をしながら話す。ほら、早く行け」

「はいはい。ふふふ。なんだか急にわがままになりましたね。でも、それくらいのほうが安心です」

「ミルでいい」

「え？」

「二人のときはミルと呼んでくれ。敬語もいらない。そのほうが俺も気が楽だ。お前の前くらいは気を抜かせてほしい。いいだろう？」

俺のわがままに、シリウスが満足そうに微笑んだ。

「分かりました。でも、今までも私の前では気を抜いてくれていると自負していたのですが？」

「聞こえなかったか？ 敬語は不要だと言ったのだが？」

ちよつと拗ねたようにねだる俺。

シリウスは上を見て下を見て、ついに「はあ」とため息をつき、ようやく諦めたのかひよいと肩を竦めて力を抜いた。

「分かったよ、ミル。これでいいか？」

「！ ああ！ じゃあ、シル、食事を頼む。二人分！」

俺の「シル」呼びに少し目を見開いた後、破顔するシル。

「ああ。了解！」

ひらりと手を振り出て行くシルを見送りながら、俺は妙な達成感を覚えていた。なんだか一仕事終えたような爽快感がある。悪役令息脱却の第一歩としては申し分ない出だしだ。

数分後、俺の部屋のテーブルに素晴らしい戦利品が並べられた。

数種類のパンと野菜のスープ、スクランブルエッグにベーコン、サラダとフルーツ。ジャムの添えられたヨーグルト。紅茶用のポットには冷めないようにとティーコゼーが被せてある。

見たとたん、ぐう、と腹が鳴った。こんなに食事が美味しそうだと思ったのは初めてだ。

早速つやつやと輝く絶妙な半熟加減のスクランブルエッグに手を伸ばす。

「ん！ 美味しいな、これ」

バクバクとフォークを口に運ぶ俺に、シルが目を丸くした。

「すごい食欲だな。いつもこれくらい食べてくれたら安心なのに。ほら、これもやる」

言いながら自分の皿からベーコンを取って俺の皿に載せるシル。無作法ではあるが、それがいかにも親しげな感じがする。嬉しくて口元が緩みそうになるのを、慌てて誤魔化した。

「ありがとう。いや、いつも奴らに囲まれた中での食事だったからな。あんな空気じゃ、なんの味も感じない。今日は久しぶりによく眠れたし、シルと一緒にだから美味く感じる」

「ふは！ そっか。……どんな心境の変化かは分からんが、お前が元気ならいい」

そつと手を伸ばして俺の頬を撫で、シルが柔らかく笑う。

シルはいつも、こうやってさりげなく俺に触れる。当たり前のようにされるそれは、家族との触れあいを知らない俺に、唯一ぬくもりを与えてくれていた。

今なら分かる。俺はこうやってシルに甘やかされていたのだ。

思えばシルにはずっと心配をかけ通しだった。もつと食べるだの早く寝ろだの、まるで親みたいなことを言っただけでくれたのはシルだけ。そう、シルだけが俺の家族。

ふ、と肩の力が抜けた。

「ありがとう、シル」

伸ばされた手に、すり、と頬を寄せる。少し高いシルの体温が心地いい。この時間こそが俺の幸せな時間。家族の時間。絶対に失いたくない俺だけのもの。

でも、皮肉なことに、俺は自らそれを失うかもしれない決断をした。

俺は公爵家を捨て、平民となる。……シルの仕える「主人」ではいられなくなる。

これから俺はシルにそれを告げる。シルの返答次第では、俺はシルを失うかもしれない。

怖かった。

シルについてきてほしい、でも強要はできない。言いたくない、でも言わなくてはならない。

相反する想いと緊張で手が震えた。

フォークをテーブルに置き、乾いた口を紅茶で宥めると、俺は内心の不安を押し隠し、なんでもないようなふりでシルに告げた。

「あんな、シル。俺はこれから投資して事業を立ち上げようと思う。投資のための元金には、これ

まで貯めた俺の個人資産と宝石類を売ったものを充当^{あて}するつもりだ。理由は言えないが、投資については勝算がある」

朝から急に始まった、言い訳のような俺の「事業計画」に目をパチクリさせるシル。

「あ、ああ。それは、まあ、いいんじゃないか？」

悪くない反応に少し安心し、紅茶をぐくるともう一口飲んでカラカラの喉を潤す。問題はここからだ。

「それである程度の見通しが立つたら……俺は公爵家に廃嫡を願い出る。家を出て平民になるつもりだ。つまり、俺に仕えたままにいるのは、この公爵家では出世できない外れクジになる。それでも……公爵家から出ることになる俺でも、シルは仕えてくれるか？」

思いのほか、最後は弱々しい声になってしまった。

だって分かっている。シルは俺にはもったいないくらいに優秀なのだ。有能すぎて弟に取られそうになったこともあるくらいに。

十年前に俺の侍従になったシルはみるみるその頭角を現し、学園を卒業するころには、父がシルを俺につけているのを惜しみ、弟のレオリスにつけようと画策するほどになっていた。

シルが学園を卒業した年、父は俺にこう言った。

「お前は優秀だ。だから、お前の侍従をレオリスに譲ってやれ。弟に兄として思いやりを見せるいい機会だろう？ なに、お前なら問題ない。必要ならまた新たな侍従を探してやるから。シリウ

スには私から話をしよう」

俺は思った。「ああ、父はシリウスまで俺から奪うつもりなのか」と。

そして父はその翌日、俺の返事を待つことなくシルにこう告げた。

「ミルリスは優秀だから一人でも問題ない。次男のレオリスのほうについてももらえないか。これはミルリスも納得していることだ。なあ、ミルリス」

「……はい」

抑え難い怒りが沸き上がったが、それは瞬時に慣れた諦観に変わった。俺にはイエス以外の選択肢など無いと思っていたから。

今なら言える。俺はあの時、本当は泣きたかった。シルは俺のものだと叫びたかった。

でも無駄なのだ。この公爵家では俺がどう抗おうと大切なものは全て奪われ、弟のものになる。何を言ってもどうせ結果は同じなのだ。

だが、シルだけは違った。シルは父の決定をいかにも簡単に覆してみせた。

彼は雇用主である父に、笑みを浮かべてこう言い放ったのだ。

「いや、感服いたしました！ さすがは公爵様です。このような形で私の忠誠心を試されるとは！ ご安心くださいませ。私は一度仕えることと定めた主人を変えるつもりはございません。私はミルリス様が主人なればこそ、こちらに仕えさせていただくと決めたのです。私はミルリス様を、生涯をかけてお支えする所存でございます」

こんな言い方をされてなお「いや、長男は優秀だから次男を支えろ」と言えるほど、父の自尊心

は低くなかった。

結局、父は乾いた笑みを浮かべ、こう言うしかなかったのである。

「い、いや、さすがはシリウス。私の意図を見抜くとは！ 見上げた忠義よ。これからもミルリスを頼む」

「はい。お任せください。このシリウス、身命を賭してミルリス様にお仕えいたします」

シルは父の想像以上に優秀だったのだ。そう、雇用主の要望をもその不興を買わずに撥ね退けてみせるほど。

シルが三男とはいえそれなりの力を持つ伯爵家の息子であることもあり、さしもの父もシルの意志に反してまで彼を弟につけることはできなかった。

こうして、シルは俺が奪われない俺の大切な家族^{唯一}となったのである。

そして今に至るまで、シルだけが俺の側にあり続けてくれる。

彼の厚意で俺についてくれるだけで、本来シルは自由なのだ。シルならば俺につかなくともそのまま後継となるだろうレオにつけるし、他所に行くこともできる。彼自身で身を立てることも可能だろう。

元々シルは、俺には過ぎた侍従であり側近なのだ。だからシルが望むのならば、俺は彼を手放さなければならぬ。

そう思っただけの事情を一息に伝え、恐る恐るシルを見た。

恵まれた地位を自ら捨てる俺に、落胆しただろうか？

シルにだけは嫌われたくない。俺は言い訳じみた言葉を必至で重ねた。

「その、平民になるといつても、商売をして稼ぐつもりだから。きちんと給料も払うし衣食住も保障する！ 軌道に乗るまでは苦勞をかけるかもしれないが……鋭意努力する。……シルが嫌なら担当を外れてくれてかまわない」

言いながら、だんだん声が小さくなってしまった。

チラリと見たシルの表情が、怒りの形相だったから。

そうか。そりゃあ怒るよな。今まで仕えてきたものを、全て俺の都合で無にされてしまうのだ。

俺は公爵家の嫡男だ。家族からいくら「可愛げがない」と言われていようとそれは変わらない。

結婚してルディアスが当主となっても、実質的な公爵家の運営は俺に任される。これまでそれだけを支えに必死で耐えて努力し続けてきたのだ。

なのに、俺は自らそれを放棄しようとしている。その上、選ぶのは平民の地位。

当たるかも分からぬ事業のために全てを捨てよ、と言うのだ。主人としては褒められたものではない。呆れられ見限られても仕方がない。

「勝手ですまない。だけど、このままここにおいては俺の未来に希望は無い。だから俺は自分で道を切り開くと決めたんだ」

シルは何も言ってくれない。……ダメか。諦めるしかないのか。

理由も言えないのに、無理について来いなんて言えないから。

「万がうまくいかなくても、シルのことは父上か、ダメなら他国にはなるが叔父上に頼んでおくから安心して欲しい。叔父上は俺を評価してくれている。だから悪いようにはしないと思う。それで……」

ここで、シルの怒りを含んだ声に遮られた。

「あなたは！」

シルが俺の言葉を遮るのは初めてだ。それだけ怒っているのだろう。その声は激情のあまり震えていた。

「あなたは……私をなんだと知っているんですか？」

ああ、また敬語に戻ってしまった。一度フランクに話したからか、敬語元に戻っただけなのに途方もない寂しさを感じる。胸がギュッと痛くなった。

「俺は……今まで言ったことは無かったが、シルだけは信頼できると、シルだけは俺の家族だと思っている」

せめて本心だけは伝えておこう、そう思って紡いだ言葉。

それを聞いたシルは、いきなり椅子から立ち上がり俺の肩を両手で掴んだ。

「ならばなぜ、俺が離れると思う？ なぜ、嫌なら担当を外れるなどと戯言を言うんだ？ 家族なんじゃないのか？ 家族ってそんなものなのか？ どうしてついて来いと言わない！ ……俺は必要じゃないのか？」

揺らぐシルの瞳。その乱暴な声音に含まれる痛みにはハツとした。

俺はシルを傷つけた？

だって、家族なんて……俺の家族は、実の家族ですらあなのに。シルに言えるわけがない。シルだけは手放したくないだなんて。平民になってもついて来てほしいだなんて。

ポロリ。抑えきれずに零れる涙。

それを見たシルの表情が少しだけ柔らかくなった。そつと俺の肩を引き寄せ、俺の顔をシルの胸に埋めさせる。

「……お前の『実の家族』と俺は違う。俺はお前の侍従になったときに誓った。俺だけはどんな時も味方であろうと。だから、俺を手放すな。側に置け。信じろ。俺はお前を裏切らない。だから、本音を言え」

本音を言ってもいいのか？ お前を困らせても、無理を言ってもいいのか？

思わずシルの腕を掴む。シルだけが唯一のよすがであるかのように。

「俺には、俺にはシルが必要だ。勝手なようだが、俺についてきて欲しいと思っている。成功する保証はない。それでも俺を信じて欲しい。俺の側にいる。俺を支えろ。どんな時も俺から離れるな。たとえ墮ちようとも最後まで見届けてくれ。俺に何を言っても、何をしてもいいから。頼む」

ふは、とシルが破顔した。心底嬉しそうに。

「熱烈だな！ 最初からそう言えばいいんだよ！ 俺はもとよりそのつもりだ。天国だろうと地獄だろうと俺を連れて行け。俺はお前を選んだんだ。俺の忠誠心、舐めんな」

そのまま俺の頭に手を伸ばし、気安い仲のようにクシャクシャと俺の髪をかき混ぜるシル。

「よ、よせ！ 髪が乱れる！」

「また梳かしてやるからいいだろ？ ようやく本心さらしてくれたんだ。浸らせろよ。……お前もつと俺に甘やかされてる」

その声は途方もなく甘い響きを含んでいた。

「俺は……お前に甘えていいのか？」

俺が甘えるだけで、お前はそんな風に笑ってくれるのか。

「ははは！ 望むところだ！ これからは思う存分お前を甘やかしてやれる。何をしてもお前から離れなくていい許可を得たからな！ 俺も好きにさせてもらおうぞ？」

言うや否や、再びグイッとその胸に引き寄せられた。

固くて温かくて……ずっとこうしていたくなる。

恐る恐る自らそつと頬をもたれさせてみた。家族の抱擁とはこんな感じなのか？ 悪くない。

ふつふつと胸に沸き上がる温かなもの。その気持ちのままにシルに告げる。

「……シルならいい。俺を好きにしろ」

するとなぜかシルの喉がグウツと鳴った。片手で目元を覆いながら天を仰ぐシル。

「ミル、それ誤解されても文句は言えないからな？ 俺以外には言うなよ？」

「？ あ、ああ。分かった」

分かったと言っているのに、シルは渋い顔で首を左右に振る。

「絶対に分かってねえ！」

「？　そもそもお前しか俺の側にはいないんだし、問題ないだろう？」

安心したからか、なんだか力が抜けてしまった。無意識のうちにきゅっとシルの胸元の服を握り、
すり、とシルの喉元に頬を擦り付ける。短時間ですっかりこの体温に馴染んでしまった。

「今日から高等学園か。……入学式なんて行きたくない」

ぼやく俺をぎゅむつと抱きしめ、シルがからからと笑う。

「はは！　……じゃあ、サボるか？」

「はあ？　そんなわけに……いや、いいのか？　俺はどうせ悪役なんだ、いまさらか。よし、休もう！　別にもう首席を維持する必要もない。新入生代表なんて知るか！　^{ルデイス}王族にでもさせればいい」

急に元気になった俺の頭を撫でながら、シルが満足そうに口元を緩めた。

「よし！　ミルにしては上出来だ」

「サボりを褒める侍従がいるか？」

「ん？　なんだ？　ご不満でしょうか、ご主人様？」

「いや、最高だな！」

一応、学園と父には「体調不良」だと伝言し、シルと下町に繰り出すことにした。

どうせ嫌われ者の長男が何をしようと、父は気になどしないだろう。それなりの成績を維持し、不祥事さえ起こさなければいい。それだけだ。

バサリとソファーに制服を脱ぎ捨て、その代わりにシルが用意したシンプルなシャツとスラックス、フード付きのコートを着た。これで「下町の小金持ちの商人の息子」の完成だ。

特徴的な銀髪は、染粉でシルと同じ黒髪に変えた。シルと兄弟という設定なのだ。

「どうだ？　シル兄さん。だいぶ印象が変わるだろう？」

くると回ってみせると、シルが驚いたように目を見張りピュウと口笛を吹いた。

「確かに！　かなり変わるな。内から溢れる育ちの良さまでは隠せていないが、まあそこは『裕福な商人の大切に育てられた一人息子』ということで大丈夫だろう」

それにしても、とききなりシルがニヤつき出した。顎に手を当てご満悦である。

「しっかし……いやあ『シル兄さん』か！　いいなあ、実にいい！」

俺が外面を取り繕うのをやめ、シルにも「ご主人様扱い」をやめるよう伝えたとなん、こいつは何も隠さなくなった。そう、その好意も。

これまでも十分甘やかされていると思っていたのだが、まだその上があつたらしい。

「ほらミル、もう一回言ってみな？　シル兄さんに可愛らしく甘えてもらん？」

両手を広げて「ほーら、おいで」と満面の笑みを見せるシル。

全く仕方がない奴だ。まあ、下町でバレぬよう今から練習しておくのも一興。

請われるがままぼすんと腕の中に飛び込めば、おいでと言ったくせに驚いたように両手を広げたままの格好でフリーズするシル。

「……ハグしないのか？」

グイグイと腕を引いて催促してやると、慌てぎゅうつと抱きしめてきた。

「いやあ、言ってはみたものの、まさか本当にやってくれるとは……。言ってみるもんだな」

「なんだ、やめた方がいいのか？」

「いやいやいや、兄・さん・に抱っこさせて!? ……よしよし。ミルはいい子だなあ。うんうん。可愛い可愛い」

俺を抱きしめたまま、あやすようにその身体を揺らすシル。

こんなこと誰にもされたことがない。温かな体温も腕も存外気持ち良くて、癖になりそうで困る。ああ、そうだ。いいのか。これからは「貴族とは」なんて気にしなくていいんだ。

だから、バカみたいな悪態をついてみることにした。

「いい子じゃないし、可愛くもないだろ。俺はレオとは違って可愛げがないからな」

思いのほか拗ねたような口調になってしまった。

だってそうだろう？ 俺がいい子で弟のように可愛かったら、悪役などされていいない。

だがシルには俺の言葉が納得いかなかったらしい。不満げに眉を寄せ、俺の頭の上にその顔を伏せるようにしてばやき出した。

「ミルはいい子だし、可愛いぞ。周りの目が節穴なんだ」

深い声が振動として伝わってくる。頭も胸もくすぐつたい。

シルが言うところの本当のこのように聞こえるからすごい。

「ふふふ。くすぐつたい。お前は……俺に甘すぎるぞ？」

するとシルは、俺を腕で囲ったままひよいと椅子に腰掛けてしまった。必然的に俺はシルの膝の上に向かい合わせて乗せられてしまうことになる。

「お、おい！」

幼子のような抱っこに慌てる俺の額に、シルがこつんとその額を合わせた。

「いいだろ？ 今までの分、まとめて俺に甘やかされてろ。な？」

そのままそつと耳元に唇を寄せたシルに、たくさんの言葉^{あまやか}を与えられる。

「いい子だ、ミル。誰よりも可愛い。それに頑張り屋だ。周りに気を配れる優しい子でもある。あと、たまに見せる照れた顔も可愛いし、わざと傲慢な態度をとったあとゴメンなさいって顔でこちらと様子を窺ってるのも可愛い。嫌いなものを食うときに一瞬だけ眉を顰めるのも、好きなものが出るとじつとそれを見つめてるのも可愛い」

シルが語っているのは本当に俺のことなのか？ 甘い声とその内容にかあつと頭に血が昇る。

真つ赤になった俺に気づき、くすりと笑うシル。

「まだあるぞ？ 全部言ったら夜まで、いや明日までかかるが、どうする？」

初めて、しかも怒涛のように耳に吹き込まれる「可愛い」に、俺の脳は一気に容量オーバー。ふしゅう、と頭から湯気が出そうになった。

ここまで言われればさすがに理解^{わか}る。実の親にさえ「可愛げがない」と言われる俺が、こいつには本当に可愛く見えているんだって。

「も、もういい！ 分かった！ 分かったから！」

「ああ。問題ない」

シルが御者に行き先を指示しているのを聞きながら、この先について思いを馳せる。とりあえず、持っている宝石は「一応まだ婚約者ということになっている」ルディ^{クソ第三王子}アスから届けられたもの以外、気に入りの数点を残して全て売り払うことにしよう。

そう、実は俺には婚約者がいる。

もちろん俺が望んだ婚約ではない。王家から出ねばならぬ側妃腹の第三王子を高位貴族に婿入りさせるため、公爵家嫡男である俺が婚約者選ばれたのだ。

ちなみにルディ^あアスは俺にとってはクソ王子だ。奴はプライドが高い上に、俺に「可愛げがない」「もつと嬉しそうにしたらどうだ」と最悪な態度なのである。

「いつも勉強ばかりじゃないか。つまらない奴だ」と言われることもあるが、そもそも俺がひたすら勉強させられているのは、俺が将来ルディ^あアスをフォローする前提で、当主教育も女主人役としての家政などの教育も受けさせられているせいなのだ。

そこまでさせられたあげく、本来俺が得るはずだった当主の座はルディ^あアスに奪われる。俺は公爵家と王家に使い潰されるだけの貧乏くじを引かされたのだ。嬉しいわけがない。「嬉しそうにして欲しければ、当主になるお前が当主教育くらい受けてくれ」と言いたくもなる。

なのに、ルディ^あアスは、俺に会う度に「仕方なく会ってやっている」という態度を隠さない。転びそうになっていたから手を繋いでやろうとしただけではたかたし、目が合えばそらされる。口

を開けば悪態をつく。

これでアイツに好意を持てるはずもない。

政略結婚の意味を理解していないのか？ こつちだつて嫌なのに我慢して会ってやっているのだ。俺を嫌つてもいいが、せめて態度には出すな！ それが政略結婚の最低限のマナーだろうが！

きつと「どんな態度を取ろうと私の立場のほうが上なのだから問題はない」とでも思っているのだろう。要はそれだけ俺を見くびっているということだ。

婚約してからも、誕生日以外には何も贈られたことがない。つまり、五歳で婚約させられたのもかわらず、贈り物はこの十年でジャスト十個。両手で足りる程度だということだ。

通常ならば、イベントやパーティーごとに衣装とアクセサリを贈るものなのに、王族としてはもとより、一般的な婚約者としてもあり得ないような不義理だ。エスコート相手に衣装を贈らないというのは「お前には気に掛ける価値もない」と示していることになるのだから。

一応、誕生日には王家からそれなりのものは届いたが、年に一度のそれすら、側近に宝石だけを指示して選ばせていたに違いない。馬鹿の一つ覚えのように毎回^{俺の瞳の色}アメジストのアクセサリ。婚約者には普通、自身の瞳の色の宝石を贈るものなのに。

パーティーで、俺は贈られた^{自分の色}アメジストを身につける。そしてルディ^あアスといえば、自らの色であるエメラルド。といえば聞こえはいいが、グリーンは偶然にも俺の弟の瞳の色でもあるのだ。つまり、俺が婚約者を「クソ王子」というのにはそれなりの理由があるということだ。

他にもある。婚約者との交流として義務付けられた月に一度の茶会。公爵家に訪れたルディ^あアス

「少し……いや、かなり外観はアレだが、中はちゃんとしてるから。……他の店にするか？」

だが一番に来たということは、シルがそれだけこの店に信頼をおいているのだということ。

「いや、シル兄さんが勧めてくれた店だ。ここがいい。入ろう」

だが俺がいいと言っているのに、シルがなぜか口元を押さえて動かない。自分でここに連れて来たくせに、どうしたんだ？

「ミル……俺を信用しすぎじゃないか？」

「？　シルを信用しなくて誰を信用するんだ？　だってシルだぞ？」

「あー！」

シルが奇声を発し、天を仰ぐ。

「どうした？　ほら、行くぞ」

仕方なくシルの腕を引きながら、もう片方の手で取っ手を掴み、扉を開けた。

「……え？」

扉を開けて驚いた。

なんと扉の内側に、もう一つ玄関口のようなものがあつた。つまりこの入り口は二重扉となっていたのだ。

しかも、内側の扉は正しく「宝石店」のイメージそのもの。い・か・にも高級店の扉。

マホガニー素材の重厚な造りにレトロモダンなデザイン。蔦が絡んだようなレリーフで「マージ」と書かれた上品な金のプレートが、真鍮製の小さなライトに照らされてキラキラと輝いている。

「外観はフェイクか」

顎に手を当てて感心する俺に、シルが「悪戯大成功」と破顔した。まるで、幼子が親に手に入れた戦利品を見せるときのような顔だ。

「驚いたか？　店主はこの筋では有名でな。気に入った客しか入れないんだ。噂の断片を集めてなんとかここに辿り着いても、大抵の貴族はあの外観で『底辺の店』『騙された』と勘違いして去っていく。逆にあの外観で安い酒店か何かだと勘違いして入って来るような奴らは、ここでその勘違いに気づいて去るって寸法だ」

つまり、この二重扉が客を選び分ける役割を果たしているということか。面白い。

「『あらかじめ知っている客』『選別に耐えた客』しか入れない店ということだな」

なかなか個性的な店主のようだ。俄然興味が湧いた。

ワクワクと目を輝かせる俺の様子に気づき、シルが勢いづく。

「ああ。扱うのは一流の品のみ。宝石の買取もするが、店主の目に適うものしか扱わない。そのかわり、買取価格も他所より高値になる。ミルの持っている宝石は、公爵家嫡男にふさわしいレベルのものだろう？　ここなら、その価値を理解した上で買い取ってくれるぞ？」

自分の目に自信があるからこそ安く買い叩くことも無い、と。うん。俺の目的に適う素晴らしい店じゃないか！

「こんな店、どうやって知ったんだ？　……あまり一人で危ないことはしてくるなよ？　ここは例外として、怪しい店には入るな」

すると急にシルがニヤニヤとしはじめた。なんだその顔は！

「もしかしてミル、俺のことが心配だったりする？」

行儀悪く肘で俺をつんつんとつき、茶化すように言って覗き込むシル。

「そりやそうだろう。俺にはシルしかないんだ。心配くらいするさ」

俺は、存外柔らかなシルの頬をするりと撫でて微笑んだ。

すると、シルが急にバシンと目元を手で押さえて、斜め上に顔をそらした。

「おい。それはどういう表情だ？」

「いや、お前……今日はデレがすごいな？ 変わりすぎだ」

よく見るとシルの耳が赤い。もしかして、照れているのか？

「隠すのをやめたただけぞ？ 公爵家の嫡男はやめると決めた。取り繕う必要など無いからな」

指で目元を隠したまま、その隙間からチラリと俺を見るシル。

「うーん。元から可愛かったが、取り繕わないミルはヤ・バ・イ・な」

「ヤバイ？ 変な顔でもしていたか？ ずっと表情筋を使っていなかったからか、まだうまく動かないようだ。気持ち悪くてすまん」

「逆だ。お前、可愛すぎるんだよ。いや、学園では少しは取り繕う方がいいかもしれん。いきなり解禁されると、威力がありすぎる」

後半は小声でブツブツ言うからよく聞き取れなかった。まあ、シルが可愛いと言ってくれるのは嬉しいから、問題ないだろう。

内扉についている薔薇の花をかたどった美しいドアノッカーを三度鳴らし、シルが声を張る。

「アル！ いるか？ シリウスだ！ 客を連れてきたぞ」

ほどなくして内側から扉が開かれた。

「もう！ 煩いわよ！ 聞こえてるわ！ 久しぶりねえ、シリウス。何の用？」

現れたのは、身体にフィットしたシンプルなブラックドレスを身に纏った麗人。

びつしりと揃った長いまつげが、その青い瞳に物憂げな影を落とす。すうっと通った美しい鼻梁と、艶やかに光るさくらんぼのような唇。紺色の長い髪は複雑に編み込まれ、その綺麗に伸びた背中では結ばれている。

パツと見は美しいご令嬢。だがそのふつくらした唇から紡がれたのは、女性にしてはハ・ス・キ・ー・な声。ヒールのせいもあるのだろうか、一八五センチあるシルより背が高い。男？ 女？

「そちらの方は？」

麗人は俺に気づくと警戒したようにその尖った顎を僅かに引き、胡乱げに目を細めた。

少しだけ傾げた首がすらりとした白鳥を思わせる。立ち姿も、たおやかでありながら凛としたものの。扉にかけられた指先にまで意識が行き届いた、美しい所作だ。

俺は麗人に向かって片足を引き、胸に右手を当て左手を差し出す正式な礼をとった。

「お初にお目にかかります、レディ。私はスノーデン公爵家が長男、ミルリース。シリウスに無理を言って案内を頼みました。どうか、私にお時間をいただけませんかでしょうか？」

俺の言葉に彼女が目が見開かれた。その瞳に浮かんだのは、純粋な興味。

長いまつげがバサリと揺れ、蠱惑的な唇が意味ありげにゆるりと弧を描く。

「あら。どうして私をレディと呼ぶの？ この声と身長で、私が男だとお分かりでしょうに」

「不快な思いをさせたのなら申し訳ない。ただ、素敵なドレスを身に纏った美しい方に対し、レディとお呼びする以外の選択肢は、私には無いのです」

「ダメでしたか？」と首を傾げると、目の前の麗人の顔がクシャリと崩れた。男らしくガシガシと頭を掻き、腹を抱えて笑いだす。

「はっはっは！ ダメじゃねえよ、合格だ合格！ 俺はアルテミス。アルと呼んでくれ」

それまでのしなやかな所作から一転。麗人は、美しいドレスを巻き付けただけのガサツな美形^男に豹変してしまった。

ドレスの裾をバサリと捲り上げ「入れよ」と俺たちを店内に促すアル。

誰だこいつは？ 先ほどまでの麗しのレディを戻せ！

案内された室内には、高級そうなソファとテーブルのセットが置かれていた。

柔らかな素材が今の流行りなのに、あえてなのか、ソファの枠は金属製。光沢を消したメタリックの鈍く硬質な輝きが、渋茶色の革素材と不思議な調和を醸し出している。テーブルの素材もメタル。古びていながら新しい。個性的なこの店の雰囲気はピッタリだ。

入って左手の壁沿いには、ガラスのケースが。その中には繊細な造りの装飾品がズラリと収めら

れていた。

正面の美しい木目のカウンターの上にあるいくつかの革製の箱のようなものは、宝石入れだろうか？

チラリと見えるカウンターの奥の部屋は、工房になっているようだ。

「ちよつとそこで待っていてくれ。茶を淹れてくる」

アルはそう言い残し、ひらひらと舞う蝶のように軽やかに店の奥に姿を消した。

「とりあえず、座ろうぜ」

シルが促してくれるのに従い、素直に腰を下ろす。革張りのソファは存外ふつくらと弾力があり、座り心地もいい。そのことに驚いて、思わず座面をそつと撫でてしまった。

「ん？ 意外と触り心地もいいな。……で、どういことだ？」

無然とした俺に、シルが店主について教えてくれた。

アルは、職人気質で貴族嫌い。煩わしい「貴族とのお付き合い」を避けるため、わざと女性の服を身に纏いあんな風に振る舞っているのだそうだ。

「あの美しい振る舞いが、なぜ貴族除けになるんだ？ このガサツな態度のほうがよほど貴族にはアレだろう」

俺が言えば、シルが満足そうにその口角をあげた。

「ミルならそう言うと思ったよ。男がドレスを着ているってだけで普通の貴族は変態扱いしやがるんだよ。そういう輩はこの店に出入り禁止」

どんな貴婦人にも劣らぬ外見と立ち居振る舞いだというのに。性別だけで判断するなど、愚なことだ。だがそれがそがアルの嫌う「貴族」というもののなのだろう。

苦笑する俺を見てシルは続ける。

「それでもこの店の品が欲しいって輩も、名の知れた『マージの店の商品』は欲しいが、自分の貴族としての評判を落とさぬように店主に貴族的な付き合ひまでは要求しない。お前みたいに当たり前の顔で『レディ』としてアルテミスに敬意を払う貴族は珍しいんだぜ？」

言いながらリラックスした様子で背もたれに身体を預け、手足をグーッと伸ばすシル。俺の方にまで伸びてきた悪戯な足をコラッと叱ってやる。

「身長は高いが、あのドレスはとても似合っていた。レディと呼ぶにふさわしい所作だったからそう扱ったまで。だが、その後はアウトだ。まさか、中身があのようにガサツな男だったとは……。素晴らしいレディだったのに、もったいない」

「はは！ もったいない、か。お前のいいところは、美しいものを美しいと感じるままに口にできるところだな。あんな環境でよくぞ擦れずにいたもんだ。さすがは俺のミル！」

「こら、撫でるな！ 髪が乱れるだろう！」

しつこく伸びてくるシルの腕を払っていると、店主が戻ってきた。

「！」

その姿に目を見張る。

戻ってくるまでにさほど時間は経っていないのに、いつの間に着替えたのだろう。装いが、しな

やかなドレスからスッキリとしたシルエットの黒のトラウザーズ、柔らかな白のシャツと濃紺のジレという軽装に変わっていた。

シンブルな装いながら、素材も縫製も最高なのが見て取れる。さながら「お忍び中の貴族のご子息」といった雰囲気だ。

髪型も顔も変わらないのに、こうしていると美形の男にしか見えない。不思議だ。

アルは盆を手にはしているとは思えぬ大きな歩幅で戻ると、俺とシルの前にポットと茶葉、ティーセツトをガチャンと置いた。

「ほら。シル、茶を淹れといってくれ。店を閉めてくるから」

言うなりそのままカウンターの裏に戻って「クローズド」と書いたプレートを取り出すと、それをかけに扉の外に行ってしまった。

茶器のぞんざいな扱いと客に対する大雑把なもてなし。あらゆる点でなかなか規格外の人物だ。だが、単なるガサツな人物というわけでもなさそうだ。

ふむ。俺は彼に対する認識を改めた。こういう人物は嫌いではない。

「閉店でいいのか？ まだ昼前だぞ？」

ゆつたりと背もたれに身を沈めながらシルに問えば、シルは慣れた手つきで茶を淹れつつ平然とこう返してきた。

「いいんじゃないか？ 店なんて開けなくても、常連の顧客からの依頼だけで十分やっていけるんだし。『たまに面白い客に当たるから』っていうのと『クソみたいな奴をからかってやる』ってい

うので、趣味で開けているようなもんだしな」

当初のシルの口ぶりからすると、「マージの店」は知る人ぞ知る有名店のようなんだが……そんなのでいいのか？

「まあ、店主本人がそれでいいのならばいいか」と、シルが淹れてくれた茶を一口。

うん。美味しい。鼻に抜けるふくよかな香り。ほどよい苦みと茶葉自体のまろやかな甘さが舌に心地いい。淹れ方がいいのもあるが、これは茶葉自体がいいのだろう。

知らず口元が緩んでいたようだ。そんな俺にシルがふつと笑った。

「美味しいだろ？」

「ああ。美味しい。色々と言いたいことはあるが……なかなか個性的な店主だな」

「お前、ああいうやつは嫌いじゃないだろう？」

その問いにはニヤリと唇の端をあげることで答えてやった。

アルはすぐに戻ってきた。

「すまなかったな。改めて名乗ろう。マージの店の店主アルテミス・マージ。アルと呼んでくれ」
砕けた様子で差し出された手を、しっかりと両の手で握り返す。

「では私のことはミルと。突然の訪問にもかかわらず心遣いいただき感謝する」

「？ まだ何も感謝されるようなことはしていないと思うが？」

「いや。十分だ。約束もなく来たというのに、誠実な対応だった」

俺の言葉に面白そうに目をくりりと回したアルは、両手を上に挙げて肩をひよいと竦めた。

「誠実？ 俺は『ドレスを着て客を迎える男』だぜ？」

もうその軽薄な言動には騙されないぞ？ 俺はそしらぬ顔で茶をすすってやった。

「でも友人の顔を立てて、すぐに着替えて俺に誠意を示してくれただろう？ それに席を外すことで俺がシルに相談する時間を与え、さらに俺が安心して飲めるようにと、わざとぞんざいなふりでシルに茶を淹れさせる配慮まで見せた」

気付かれないとでも思ったか？ 甘いぞ、アル。

「ここまで気遣われれば感謝くらいはするさ。この茶葉も入手困難なはずだが？ 君のもてなしに感謝する」

心からの謝意を伝える俺に、アルは哑然として口を開けた。そして言われた意味を理解したのか、みるみる赤くなる。ああ、肌の色が白いから分かりやすいな。なんだか微笑ましい。

「まさか、褒められるのに慣れていないのか？ 意外と可愛いのだな、アル」

にこつと微笑んで褒めたとたん。

「おい、シル！ お前のご主人様、なかなかの性格してやがるな!」

照れ隠しなのだろう。俺を指さしながらシルにくつつかかるアル（どうでもいいが、人を指さすな!）。が、シルにさらりとう返され、彼は余計に口を開ける羽目になった。

「俺のミル、最高だろ？」